

大和王朝の飛鳥・奈良・京都の地勢をみます

— (その2) 京都 —

(その1) では奈良盆地(飛鳥・平城京)とその南の吉野等について述べました。ここでは奈良盆地につづく京都盆地の地勢と、併せて大和王朝と奈良盆地と京都盆地との結びつきについて述べることにします。

別紙にこの地方の略図「奈良盆地と京都盆地」を掲げますのでご参照ください。(その1と同じです)

(1) 京都盆地の地勢

京都盆地は平城京の北側の平城山(ならやま、標高100Mの台地)がそのままほぼ平地として北へ続きます。平城京と平城山との標高差は30メートル位です。

盆地は平安京を含め山城国の大半をしめます。平安京の北の郊外は山にかかります。

東西と北が山並みです。南は奈良盆地で、海には接していません。

山城国は現在の京都府内になりますが、京都府よりは狭い範囲です。山城国の西側に当時丹波国がありましたが現在この地域のほとんどは京都府です。又北側に丹後国(日本海に接する)がありましたが現在は京都府です。京都市内や南の地域は山城国で京都府内です。現在の京都府の方が山城国より広いのです。

尚、“やましろ”は奈良時代までは「山代」・「山背」と表記していました。「山城」は平安遷都後の表記です。

そでは京都盆地の南の方面から見てみます。

平城京(奈良市)から平城山(標高100Mの台地)に至りますと直ぐに山城国となります。ここが京都盆地の南端です。ここから北の盆地の端(標高100M)まで直線距離で40KM位です。

西側は大和国(奈良)より生駒山(642M)山系が連なっています。山系の西側は摂津国(大阪府)です。東側も山並み(高い山で600~700M位)で、平安京では東山と呼びます。

山並みの東側は伊賀国(三重県)や近江国(滋賀県)に接しています。

要するに南北40KM、東西11KMの盆地で、奈良盆地とほぼ平地でつながっていると思って良いでしょう。(京都盆地の南端と奈良盆地の北端の

標高差は30M、ここは段丘になっています)

主要な地名お南からあげてみます。

先ず木津です。木津川の荷揚げ港(平城京向け)として古代繁盛しました。更に北に向かうと宇治です。宇治は平等院で有名ですが、宇治は京都への向かう軍勢が南は奈良から、東は滋賀の大津から集結する軍事上の拠点でもありました。(源平の戦い等)

それから北へ行きますと伏見です。伏見は平安京の外港として古代より近世まで栄えました。伏見の西が淀・山崎(大山崎)ここも交通の要所で商業都市として古代、中世栄えました。伏見の北が平安京(京・京都)です。

伏見の西で大山崎の北、平安京の南西の位置に長岡京がありました。長岡京は桓武天皇が平安京に遷都する前に築き10年程都にした後に廃都にしました。(平安京遷都794年)

伏見の東には丘のような桃山(江戸時代からの名称)が一つあり、更に東側に稻荷山や醍醐山の山並みからつながり、北へ向かって平安京の東山となっていきます。

平安京の条坊は南北5, 2KMですが、盆地の北端は平安京の条坊の外更に2~3KM先となります。

平安京は南北5, 2KM、東西4, 5KMで、標高は北側で60M位、南側で40M(京都駅)位で、標高差20メートル、北から南へゆるやかに傾斜しています。歩いていてもあまり坂を感じません。

この京都盆地は南北とも伏見の地に向かってへ低くなり、更にその西の淀・山崎で更に低くなります。標高が一番低くい所で、14Mです。川は北から、南から全てこの低い地に向かって流れています。

南から木津川です。木津川は源を東の笠置山として、西流して木津(標高32M)に達し、そこから北向きを変え、宇治(標高19M)の西側を流れ、巨椋池(おぐらいけ)当たりで西向きを変え巨椋池の南側を通過して山崎(標高15M)で淀川に合流します。

次に宇治川です。宇治川の源は琵琶湖(標高84M)です。大津から流れ出る時は瀬田川と呼ばれ、宇治(標高19M)あたりからは宇治川と名前を変えます。

琵琶湖からは南に流れ、途中で宇治に向かって西に進み、巨椋池に注ぎ込み、更に西に進み山崎(淀)で淀川と名を変えます。

さて巨椋池ですが、現在は埋め立てられてありません。古代から近世まで

は大きな池でした（周囲 16 KM）。木津川も宇治川も巨椋池に流れ込んで出でいくルートを取っていたこともあります。（現在の京都市伏見区から宇治市にかけての地域）

今度は北側から山崎・淀に向かって流れ来る川です。

鴨川は平安京の条坊の外の東側を流れて条坊の南の地点（標高 40 M）から伏見に向かって東南に向かい巨椋池の北側から淀川に流れ込みます。

北からはもう一つ桂川が淀川に流れ込みます。桂川は平安京の外の西側を南東方面に流れ、淀川に流れ込みます。

整理しますと京都盆地を流れる四つの大きな川は南（木津・宇治方面）から、木津川と宇治川、北（平城京方面）からは鴨川（平城京の東）と桂川（平城京の西）が全て淀・山崎で合流して淀川となります。

この淀川は南西に流れて難波津で大阪湾に流れ込んでいきます。

伏見は戦国時代伏見城のある所として有名ですが、それ以前の古代から幕末まで交通の要所として、京の外港として賑わっていた町でした。

難波津から運ばれた荷物は淀、伏見で荷揚げされ、陸路京に運ばれました。江戸時代に高瀬川（運河）を開設してから、伏見で底の浅い高瀬舟に荷物を載せ替え京まで船（高瀬舟）で運ぶルートも出来ました。（現在は使用されていません）

桓武天皇は平城京から長岡京（平安京の南東で桂川の西側）遷都し、更に 10 年後の 794 年（延暦 13 年）に平安京に遷都しました。

この理由は何でしょう。

桓武天皇は、歴代天皇の内、天武天皇や後醍醐天皇と並び称され、実権を掌握した天皇でした。ですから元明天皇と藤原氏が地元の飛鳥地方の豪族を政権から切り離すために藤原京から奈良の平城京に遷都したとする同じ理由とは考えられません。

通説では奈良での興福寺や東大寺等の寺院勢力が強くなり、政治に関与し、この排撃が難しくなったので奈良とは別の地に都を設けようとしたとのことです。

桓武天皇は平安京には寺院勢力排除の為に、国立の東寺と西寺以外に洛内に寺を作らせませんでした。そして奈良の寺院勢力の平安京での活動をお封じました。今日京都には数えきれないほど寺がありますが、これは平安後期から造立が認められてきたものです。清水寺や比叡山は平安京の郊外ですので当初より許可されていました。

長岡京を10年で平安京を作つて遷都した理由です。

長岡京遷都の責任者の暗殺をめぐつて、遷都反対派とみなされた早良皇太子を廃位した事件が起こります。その後早良親王は淡路への流刑の移動中に無実を訴えて自殺し、その怨靈のせいか疫病などよろしくないことが長岡京で起こった為に平安京を作つて遷都したとか、又遷都の理由に長岡の地は湿気が多く住むのに適さない等の理由を後世あげていますがはっきり分かりません。

(2) 大和王朝が拠点を奈良盆地と京都盆地にこだわった理由

さて飛鳥の藤原京から奈良の平城京さらに長岡京、平安京への遷都の理由は推測を入れながら述べて来ましたが、何故か都は奈良盆地・京都盆地にわたる南北65KM東西10KMの細長い盆地からほとんど離れませんでした。

大和王朝の初期の頃に盆地から出て隣の河内や難波に宮（天皇の住まい）を構えたことはありますし、飛鳥に定住した後も一時的に難波、近江の大津などに宮を設けたことはありますが、ほとんど両盆地にありました。

平安京は794年（延暦13年）から1869年（明治2年）の東京遷都まで都でした。

奈良盆地と京都盆地に定住の理由も推測するしかないのですが、一つは肥沃な土地である。水利が良く水田稲作に適した土地であることです。

注：弥生時代初期の水田の耕作は、周りの山々から幾筋も流出する小川とその水が自然に外に流れ出る盆地が最も適していた。海に面して大河が流れ出る扇状型の平野の水田耕作は農業土木を駆使して農業用水の確保が必要です。

古代も今も盆地は、自然のままで水田を作ることが出来、水田に最適です。扇状型の平野での大々的な水田耕作は、盆地での水田耕作の後に出現しました。

二つ目には大和王朝の軍事的な防衛の問題です。瀬戸内海方面からの敵の水軍に対しては、大阪湾に面した難波津や大阪から平地の河内では防ぎきれない。

葛城山系や生駒山系を城壁代わりにして防御するため山の東側の盆地を拠点（都）としたと考えられます。敵は国内外を想定します。

但し大和王朝の大王（天皇）によつては外敵を恐れず、経済活動に便利な

難波や河内に本拠地を置いたこともあります。

又天智天皇のように日本軍が朝鮮の白村江で唐と新羅の連合軍に負けて撤退したため（663年）、両軍が日本に進軍して來るのではないかと思い、難波、飛鳥を離れて近江の大津（滋賀県の琵琶湖の西側）まで拠点を避難した天皇もいます。

三つ目に、奈良盆地は内陸ですが難波津とは大和川で結ばれており、水運（舟）が使える点が有利です。

京都も難波津とは淀川の水運が使えます。

この外に日本のはほぼ中央で西にも東にもにらみをきかせられる所との説もあります。

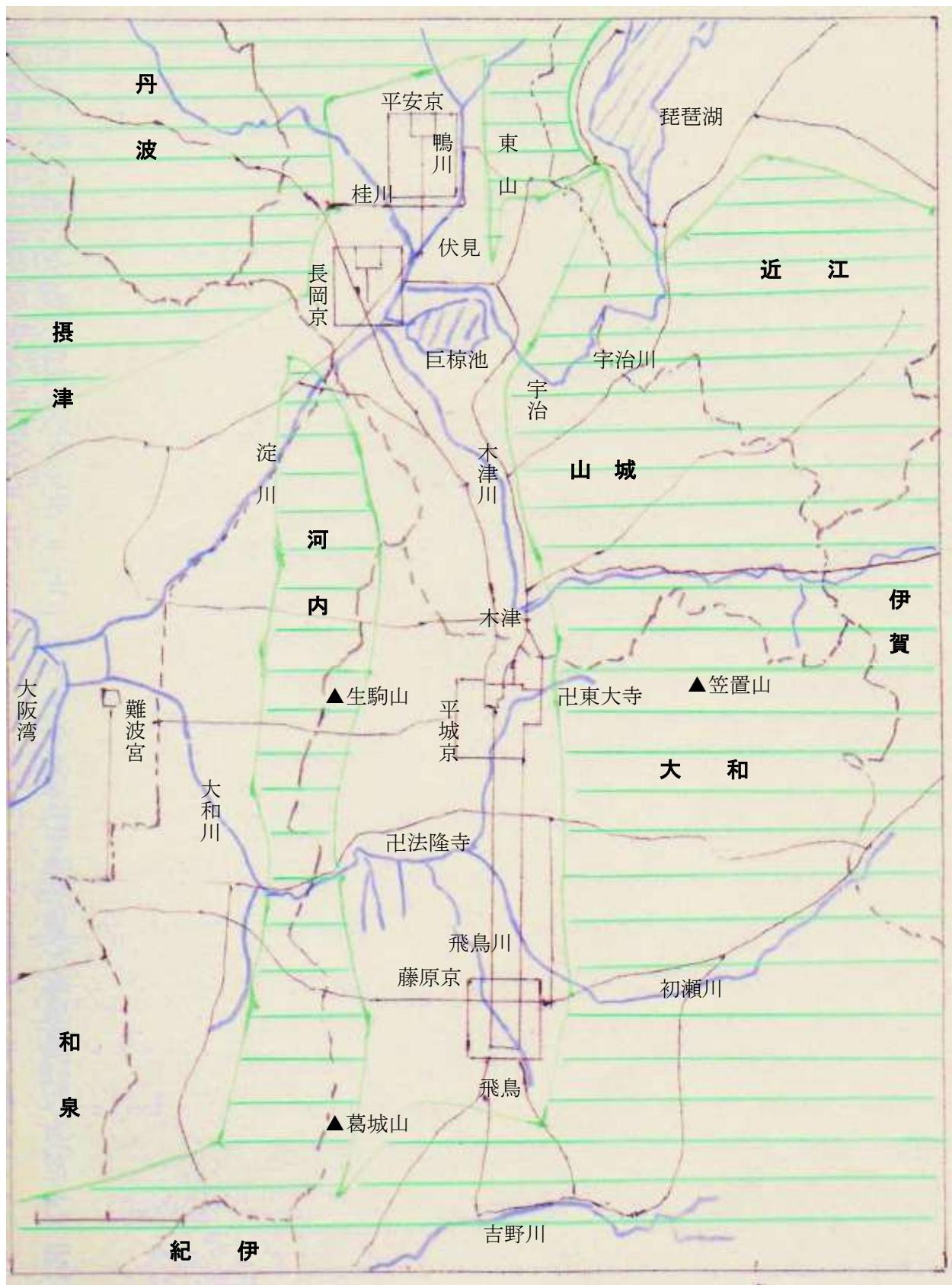
古代から江戸時代まで大和王朝の拠点は（日本の首都、皇居がある所）は、ほとんど奈良盆地とそれにつながる京都盆地にであったことは事実です。

この地を地勢的に見て、軍事的、経済的な優越性を考えて見ました。

以上

2014年9月2日

梅 一声



紫線：道路

緑線：山岳部

青線：河川・湖・海

点線：国境